

---

# 彼と彼女と契約と

玖風ソラト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼と彼女と契約と

### 【Nコード】

N0655R

### 【作者名】

玖凧ソラト

### 【あらすじ】

心優しい一人の死神。彼女は人を愛していた。そんな彼女にある日大きな変化が訪れる。泣き続ける彼女が、少年と出逢って全ては変わった。新しい彼女のあり方に少女は初めて生きることを知った。

## プロローグ

何も無い空間でぐるぐるくと彼女は踊る。

上も下も右も左もない、真っ暗な空間。

鈍く光る鎌を手に黒い髪を舞い躍らせて、ぐるぐるぐるくと回り、踊る。

その頬を濡らしながら、か細く唄いながら、規則もなくステップもなくただただ思うがままに、ぐるぐると踊る。

心優しき一人の死神。

流す涙は死に行く人を送る導となり、

唄う言葉は魂を優しく包み込む。

人のことが大好きな死神。

今日もまた、一人で泣きながら、踊りとも言えない踊りを踊ってる。

静かな夜だった。

月明かりの無い、新月の夜。星明りだけが部屋を照らしていた。

『……………だれ…?』

真っ白い部屋の中央、簡素なベットに寝ている少年が、ふと視線をドアへと向ける。

『…おねえさん、だあれ?』

『誰、かしらね。好きなように呼べばいいわ』

黒いフードに星明りを受けて鈍く光る鎌を手にした少女が静かに言う。

彼女はベットの脇に立って少年を見る。

『ぼく、しぬの?』

『……ええ。迎えに来たのよ』

『おねえさん、ないてるよ。かなしいの?ぼくがしぬから?』

『泣いてなんかないわ』

『なかないで、なかないでおねえさん。ぼく、おねえさんがむかえにきてくれてよかったよ。ぼくのためにないてくれる。おかあさんもおとうさんもみんな、ぼくのためにないてくれる。これいじょううれしいことはないよ』

にこつ。つとあどけなさの残る顔で笑う少年。

少女はただ無言で頬を涙で濡らしながらも鎌を少年にあてがう。

『ぼくはね、うまれてきてよかったとおもったよ、おねえさん。さ  
いごにそばにいてくれて、ないてくれてありがとう』

静かに泣きながら少女は鎌を振り下ろした。

穏やかな顔でベットに横たわる少年にそっと触れて部屋をでた。

『…どうか安らかなる眠りを……私には祈るしかできないけれども』

命を刈り取る私が祈るなんておかしいかもしれないけど、どうか

死した人たちに安らぎと安息を与えてください

全てのいとしい人々に、残酷なまでに平等な愛と慈悲を与えてくだ  
さい

私の流した涙の数だけ

罪が許されればいい

私の流した涙が、人の心を洗ってくれればいい

どんな人でも、私は最後に傍で泣いているから

世界に愛されていることを知ってください

世界に望まれていることを知ってください

私は、傍にいます

命尽きるその瞬間まで・・・

## 遭遇（前書き）

ゾンビの前での彼と彼女の遭遇！！

……ゾンビじゃなくて“不死人”だって？別にいいじゃない似たよ  
うなもn

え？全然違う？もうどうでもいいじゃん

## 遭遇

夜、月が輝く真夜中に近い時間。闇にまぎれて人影がいた。1人が口を開く。

「アリス、次は？」

「はいはい…えつとねえ“不死人”の魂回収。要は狩れってことよね」

「……それは違うくないか？」

黒いフードから金の色彩のこぼれる人影が物騒なことを言う。それはまるでアンティークドールのような少女だった。

金の髪に青の目。精巧に作られたかのような顔には楽しげな笑みが。無邪気で、それゆえに残酷な子供のような笑み。

“不死人”

文字の指すとおり、不死のもの。術によって、あるいは人体実験の末に、あるいはとある呪いのために出来る存在であり、死神が魂を刈ることが珍しい浄化能力を持つ稀有な人物が殺さない限り死なない。

ゾンビよりも欠点がなく厄介な存在であるうえに、思考能力は低く、無差別に行動するため現世への影響力は、その他の生き物を圧倒するほど大きい。

その結果が死神による魂の刈り取り。

生と死の境界を崩さないためにも魂ごと刈り取りもとの輪廻に戻すのだ。

「“不死人”なんて絶好の標的えものじゃない。ああ、腕が鳴るわあ」

「……………もつやだこの相方パートナー」

呆れたように美夜はぼやく。心なしかその紫の目が遠くを見つめている。

アリスに対してまるで朝と夜のような対比の黒髪に紫の目。アリスが昼なら美夜は夜を体現したかのような二人組みは、静かに得物を構えて下を見下ろす。

街灯の明かりの届かない月明かりだけに照らされた路地に、ふらふらと動く人影がいくつも現れる。

「ま、いいや。とりあえず“不死人”も出てきたことだし

狩りの時間だ」

「派手にやるわよ」

美夜は左手の手首に右手をかざし、アリスは両手首に両手をかざす。それぞれが手首につけた腕輪。石を丸くくり抜いて形造ったような腕輪に手をかざしながら、屋根から飛び降りる。

「開錠【死神ノ鎌】」

「起きて【双頭ノ死銃】」

美夜は光を鈍く反射する身の丈を越すような黒い大鎌を、アリスは真っ黒な中に金の装飾が施された双銃をそれぞれ構え、着地すると同時に武器を振るう。

特に特殊なことは必要ない。彼女たちは死神だから。

ただ一撃、“不死人”に武器を触れさせるだけでいい。攻撃を食らわせるだけでいい。

それだけで魂は刈り取れる。

「さあ、抵抗するが良いわ！！せいぜいわたしを楽しませてよお！」

「…バーサーク戦闘バカが出た」



倒しても倒してもキリがない。としか言いようのない現状にアリスが真っ先に困惑と不満の声を上げた。

すでに最初にみた数より数倍の密集度の中で二人は動き続けていた。死神ゆえの人外の能力がなければすぐさまへばるであろう数だ。

「もしかして迷い込んで現れた、ただの自然発生的なものじゃないのか？」

「ありえるわね。変な奴らなら“不死人”を私兵団代わりに使うかも。こいつらを倒せるのは一部の者だけだし……でもだつたら何が目的でこんなにここに現れるの？もし一般人を狙ったとしても、数体だけで十分じゃない！」

「それは……」「うわあああああああああああ……！……何！？」

「まさか一般人が迷い込んだんじゃないでしょうね！？」

「アリス、ここは任せた！！」

「ちよつと！？美夜！！」

美夜が一息に鎌を大きく薙ぎ払い、空いた隙間をぬって声の方へと駆け抜ける。一回では抜けきれず、何度も無理やり隙間を作っては駆けた。

視線の先に人影を見つけ、さらにそれが“不死人”でないことを認識した瞬間、美夜は思い切り踏み切るって跳躍すると、その人影の前に着地した。

「そこを退け!!」

人影が“不死人”に押し倒されるようにしているのを美夜は鎌の一振りですに乗っていた“不死人”を消し、人影に声をかけた。

「大丈夫？」

「っはあ、ごほっ。遠慮なく首を絞めやがって……何なんだよこいつら!？」

少し長めの黒髪に黒目。学生服を着た青年が、喉に手をやりながら起き上がる。何故真夜中を通りかかったのか知らないが、美夜にとって人は命を刈り取る対象であり、守るべき存在でもあった。

数少ない【人】に対して友好的であり、優しい彼女がいたところに迷い込んだことが彼の不幸中の幸い。でなければ、献身的には助けてもらふことなくせいぜい命が助かった程度だ。

人が怪我しようとも命があるだけマシだと思え。というのが死神たちの多くの見解で、そのくらい死神たちは人に重きをおかない。

「あなた、何でこんな夜中にここに？」

「消しゴムが無くなったからコンビニに行ってたんだよ」

「そう………間が悪かったわね。こんなところに迷い込んでしまうなんて」

美夜が彼の首に手を添えると、小さく言葉を呟く。淡く光ったと思っただけの首にあった締め付けられたような後が消えた。同じように頬の擦り傷も治す。

「痛くない……？」

「死にたくなければ私の後ろにいて」

「お、おい……死にたくなければって」

「言葉のとおりよ」

「美夜ってば、そんなささいな怪我まで治しちゃって……ほんっとヒトに優しすぎるくらい優しいんだから」

二人を囲む“不死人”の一角が崩れて消えたと思えば、アリスが金髪をなびかせてこっちへと来る。鋭い視線で青年を見て、彼を背に庇うように美夜と並んで立つ。

「何？こいつらの目的って彼？さっきから増えなくなったわ」

「かもね。普通なら食い殺される事が多いんだけど、首を絞められていた辺りそうかも」

「体を傷つけたくない理由があるのか、傷つけられないのか知らないけどこいつらにそんなこと考えるだけの知能はないわよ。その子、どっかから狙われてるんじゃない？」

ちらつと。とアリスは青年を視野に入れたかと思っただけで正面  
に向き直り愛銃を構える。

青年が「狙われるって何だよ!？」と言わんばかりに呆然とアリス  
を見たが、アリスは彼の視線を気にも留めない。もはや空気だ空気。

「もう夜明けまで時間がないわ。早くわたしたちも戻らないと」

「もうそんな時間?」

そう言ったかと思うと美夜は鎌を両手に握り、口ずさむ。

「女王は言った 首を切れ

赤い赤いハートの女王は 血 が見たいと

チエシヤ猫は無関心 帽子屋は傍観者

沢山の 死 を与える鎌は啞う  
「

お遊びは終わりだ。

そう言つて美夜は黒い鎌をさらに禍々しく形を変化させる。持ち手に赤い模様。刃に血のような波紋。命を刈り取るそれはまさしく【死神ノ鎌】

ストッパーを外した全身全霊をかけても抗えない死の刃。

「美夜も好きね、その物語。まあ、言つたとおりにするんだけどね  
「

アリスも嬉しくて仕方がないという感じの満面の笑みで銃を構える。これから起こることが「楽しみで仕方がない」とアリスは言った。

「遊ぼうか、踊ろうか。私の踊りを、私のゲームを。すべてがすべて終わりしかないけどね。わたしと一緒に終わらしましょう、わたしが終わりへと導いてあげるわ」

二人が本気で力を解放した。死神として自分が持てるだけのすべての力の中、リミッターのかかっていない範囲での全力。

現世への影響を考えたうえで、滅多に開放しない死神の力は、リミッターをかけていても“不死人”相手には十分すぎるほど絶大だった。

あっという間にまわりの“不死人”の人影は消え去り、その場には三人だけになる。

ちらりとアリスが青年を視界にいれて、やはりすぐに興味をなくしたかのように視線を外す。美夜はアリスに苦笑し、青年に近づいた。

「君は随分と“チカラ”が強いみたいだね。苦労してきたんじゃないの？」

「っ分かるの!？」

「ああ、人はそれを“見鬼”とか“霊力”、“靈感”と言っていたかな？人持っているにしては少し変わった質の“チカラ”みたいだけど」

「異質な“チカラ”ね。探れば分かるかもしれないけど、そこまでしてあげる義理がわたしにはないし、する気もないけどお」

「アリスってば、そういうことを言わないの。簡単にだけど、少し封じておこうか」

「美夜!!」

「アリス。あなたが言わなければ予定外の力を使ったなんてばれないわよ。これくらいならたいした手間でもないし」

「干渉のし過ぎよ、美夜。本来ならすぐに立ち去っておくべきでもあったのに、さらにたかが一人の巻き込まれたちょっと力のある人の為に美夜の力を使うなんて」

アリスがただでさえ鋭い目つきをしていたものを、視線だけで人を射殺さんばかりのものに変えて青年を睨む。

「私の為よ、アリス。そんな怖い顔しないでっば」

アリスの視線をものともせず、美夜は青年の額に手を伸ばして触れると、小さく呟く。

淡く美夜の手が光を放ち、すぐに触れていた手が離された。

「はい、終わり。これでだいぶチカラを抑えられたわ。ついでに私たちに会ったという記憶も消させてもらっね」

美夜の手が青年の視界を塞いだ一瞬のあと、すでに青年がその場に一人残っているだけだった。

青年は少しぼおとしたかと思うと、何事もなかったの用に家に向かって歩き出した。

美夜とアリスは、屋根の上からその様子を見た後「帰ろうか」と忽然と姿を消し、その場所はまるで何事もなかったかの静けさを取り戻した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0655r/>

---

彼と彼女と契約と

2011年11月13日22時14分発行